Bulletin of Jumonji University, vol.53, 2022

研究ノート

授業研究を“核”とする学校づくり運動に関する研究
―島小における学校公開研究会に関するプログラムを中心に―

Overall Research on the Creative School Management Movement Centered on Teaching-Related Research; Focusing on the Program at the School Study Seminar Open to the Public at Shima-Elementary School by SAITO Kihaku

狩野　浩二
KARINO Kouji

要　旨

斎藤喜博（1911-1981）が41歳にして校長となった公立学校、島小学校（群馬県）は、1952年から11年間にわたって、斎藤喜博校長の下で、特異な教育実践を展開した。その実践の特徴は、児童の姿を公開するというところにあった。斎藤は、なぜ、児童の姿を公開したのか。それは、授業のなかで、教材の価値や内容ではなく、子どもと教師との対話を重視したことが直接的な理由であり、その対話そのものを磨き上げ、質の高い内容にしていくことが子どもの学力を形成するという信念である。実際、斎藤が校長を務めた島小を原点とする学校づくり運動では、この原則に従って学校づくりを展開した結果、子どもの学力を向上させている。本稿では、そうした学校づくりの原点となる島小において、子どもの姿を公開するということを目的に行われた学校公開研究会のプログラムに光をあてる。全８回に及ぶこの行事のプログラムを通して、島小で目指された学校づくりの内実に迫るものである。

１．島小における学校公開研究会

斎藤喜博（1911～1981）が校長として学校づくりを行った（1952～1963）島小（群馬県佐波郡島村立島小学校，以下“島小”と略記）では，学校公開研究会を合計８回に渡って行っている。本稿が対象とする“授業づくりを核とする学校づくり運動”の中では，最も多い回数の学校公開研究会を行った学校である[*1]。

斎藤の島小における校長在職年数は，合計で11年間（1952～63年度）である。その中で学校公開研究会を実施しなかったのは，最初の３年間（1952～54年度）である。

では，なぜ当初の３年間は，学校公開研究会を

十文字学園女子大学 教育人文学部 児童教育学科
Department of Elementary Education, Faculty of Education and Humanities, Jumonji University

キーワード：教授学、授業研究、教師教育、公共性、教育実践

行わなかったのか。それはおそらく，学校公開研究会を行うだけの内実が学校内部においてつくれなかったからである。

後述するように，斎藤が赴任した当初の島小では，学校を変革する仕事が中心であった。学校をかえる仕事に３年間の時間が必要だったといってよい。

斎藤は41歳で島小に校長として赴任した。赴任当初は，斎藤赴任以前から島小に在職する教師がいた。それは斎藤校長以外の全教職員である[*2]。管見の限りにおいて，当時斎藤喜博より年齢が若い教師は，井上光正（20歳），船戸咲子（25歳），金井栄子（27歳）の３名だけである[*3]。斎藤の学校づくりの２年目（1953年）には，新任教師として北爪文夫が着任する。しかし，それも２年間だけである。1955年３月には他校へと異動してしまう。ようやく後の島小を支える教師たちが揃いはじめるのは，1954年に武田常夫（25歳），赤坂里子（23歳），金子緯一郎（31歳）が島小に異動してくる３年目（1954年４月）である。

島小は，公立の学校である。従って特別な人事が行われたということではない。しかし，斎藤赴任以前から島小にいた教師たちは，なかなか斎藤の学校づくりに入り込めなかった。斎藤赴任以降に島小に異動してきたり，新任で赴任してきた教師たちは，その後の斎藤の学校づくりを支える[*4]。

こうした人事上の状況などをみた限りにおいて，当初の３年間の実情がよく理解できる。斎藤赴任以前の教師たちは，いわば“封建遺制”といってもよい“しがらみ”の中で日々を送っていた。それを変革する仕事が斎藤校長赴任当初の３年間である[*5]。

さらにいえば，島小に通う児童は，新入生を除けば，すべてかつてから島小に在籍している。斎藤赴任以前から同校にいる教師によって育てられてきている児童である。斎藤赴任当初は，“いじけた子ども”とか，“抑圧された子ども”という言葉が同校の文献に多く登場する[*6]。その児童を育てる家族は，従来の島小のやり方に慣れ親しんでいる[*7]。斎藤がそれまで続けられてきた学芸会を一度は廃止する[*8]。古いしがらみの中で特定の児童だけが活躍する。その他の児童は，取り巻きとして放置される[*9]。こうした格差を温存したり放置したりしてきたのが斎藤赴任以前の島小である。それを支えてきた学校や教師，地域との闘いが斎藤赴任当初の課題である。

さらには，学校の立地する島村の住民たちは，さらに古くからの慣習によって生活してきている[*10]。こうした事実を変革する仕事に斎藤は着手した。島小の学校づくりの初期において斎藤は，公開に値する事実を創る仕事に集中する。

本稿の課題は，校長として合計８回にわたる学校公開研究会を斎藤が継続的に行った，行えたのはなぜかということである。それも，ただ単に同じことの繰り返しをしたということではない。むしろ，そのプログラムを見ると，次第にその内容が変化している。そうした事実が生じたのはなぜか。それが，本稿の中心課題である。

2.　斎藤校長の赴任と学校公開研究会

斎藤が島小に赴任したのは，1952（昭和27）年である。その時期の島小の状況は，先述の通りである。改めてかいつまんでいえば，斎藤が赴任した当時は，封建遺制といってもよい状況が学校を取り囲む地域には存在した。かつての権力者や富裕層とそれ以外の住民との間には，大きな隔たりがあった。その関係性が学校の内部において大きな影響を与えていた。そうした過去のしがらみから学校や児童，教師を解き放つ仕事が当初の学校づくりの中心課題であった。

そうした中で，斎藤校長４年目の年（1955年）から学校公開研究会が開催される[*11]。学校づくりの事実を社会に対して公開しようとするのである。

ちなみに，島小の学校公開研究会は，２日間にわたる大規模なものである。第６回学校公開研究会（1960年）からは，従来の学校公開研究会に加

えて，小規模の学校公開研究会を追加開催している。この学校公開“小”研究会は，前年秋に行われた学校公開研究会の中からいくつかのプログラムを選び，主として群馬県内の参観希望者向けに，年明けに行われた。

学校公開研究会は，一般的には，半日程度で実施される場合が多い。例えば筆者が関わる今日の学校の多くは，学校公開研究会を概ね半日の日程で取り組む*[12]。それは，半日をかけて公開することが妥当な内実をその学校が備えているからである。大学の附属学校・園などの場合は，１日や２日間のプログラムが計画される場合がある。しかし，それらは，島小とは異なる動機で取り組まれている。いわば，一種の使命感のようなものである。当該地域の学校に対して模範を示すというような目的である。従って，公開の時期は，１学期が多い。本来であれば，３学期などに取り組むべき学校公開研究会ではあるが，しかし，社会からの要請により１学期に実施することが多い。

それに対して島小の場合は，学校独自の取り組みである。従って学校公開研究会は児童や教師たちが最も力を発揮できる時期（２学期から３学期）に行われた。どこかから要請があったわけではない。あくまでも学校独自の取り組みである。その目的は，児童の姿を公開するというところにある*[13]。

斎藤は，児童の姿の上に学力が現れると考えた*[14]。児童の姿の上にこそ，学力を現し得ると発想した。学校公開研究会は，児童の姿を公開する場と発想したのである。この点が他の教育研究とは異なる視点である。

3.　学校公開研究会のプログラム

全８回にわたって取り組まれた学校公開研究会は，その年ごとにプログラムの内容が少しずつ変化していっている。おおまかにいえば，第１回（1955年）から第４回（1958年）までは，主として島小教師たちの実力を磨き上げるような目的でプログラムが組まれていたように見える。例えば，学校公開研究会初年度となる1955（昭和30）年度においては，学校公開研究会に先立って，島小教職員による“合宿研究会”が行われている。これ以降，学校公開研究会と対になるようにして，全８回の“合宿研究会”が毎年実施される。その中で取り組まれた島小教師たちによる教育研究活動が学校公開研究会のプログラムとして組まれる。つまり，島小教師たちが各自のテーマに基づいて，実践的に研究を深めていく。その過程に沿って，合宿研究会が行われる。その後に学校公開研究会が開催されるわけである。

ところが，後述するように公開５回目となる1959（昭和34）年頃になると，次第に島小教師による教育研究発表のプログラムが少なくなっていく。それに伴うようにして，校長である斎藤自身が島小の実践について語るプログラムが作られていく。さらには，島小の外部からの応援者たちが研究報告や教材の提供，教育活動への支援などを展開していくようになる。その上，児童の活動がその中心となっていく。

以下は，島小における学校公開研究会のプログラムから，島小教職員による研究発表に関する演目を抜き出したものである。なお，教職員の氏名は，同時代の文献中では，仮名となっているので，他の文献を参照しつつ，本名を類推して括弧内に示した。

第１回学校公開研究会の，教師の研究発表に関わるプログラムは以下の通りである*[15]。

1，職場づくり……泉（船戸咲子）
2，職員合唱について……森田（赤坂里子）
3，地域との結びつきについて……田中（金子緯一郎）
4，島村の子どもについて……川尻（井上光正*[16]）
5，「この三年間で得たこと」について……小島（栗田〈旧姓：柴田〉梅乃）*[17]

同回の２日目に関する教師の研究発表に関わるプログラムは以下の通りである。

1，図画教育について……出月（大沢清剛*[18]）

2，音楽教育について……志賀（武田常夫）

3，演劇について……田中（金子緯一郎）

4，家庭科教育について……平井（海東照子）[*19]

この資料が示しているように，第１回学校公開研究会（1955年）では，８名の教師が研究発表を行っている。そのうち，金子緯一郎は，２日間にわたり２回担当している。同年度には，学級担任が12名，校長の斎藤，教務主任の茂木，庶務主任の木村と学校全体で15名の教師が勤務しているが，そのうち，５割を超える教師が研究発表に当たっている。学級担任の中で言えば，12名中８名であり，７割に迫る。ちなみに，学級担任をしている中で，発表をしなかった教師は，本校１年担任の加藤とみ子，本校３年担任の金井栄子，分校１年担任の田島冨佐子，分校２年担任の杉本和子の４名である。こうした事実からみる限りにおいて，教師による研究発表に力が入っていたとみてよいと思われる。

次は，第２回学校公開研究会（1956年）のプログラムである[*20]。教師の研究発表に関するプログラムは次の通りである。

一[*21]　海東照子　田島冨佐子

二[*22]　井上光正　船戸咲子

三[*23]　武田常夫　杉本和子

四[*24]　児島環　青山重大

五[*25]　金子緯一郎　大沢清剛

六[*26]　金井栄子　赤坂里子

このように，教員がペアになり，６つの分科会で発表を行っている。総勢12名であり，学級担任を持つ教師がすべて発表に当たっている。ただし，分科会においてペアで担当している点が，第１回とは異なるところである。発表をしなかったのは，校長の斎藤，教務の茂木，庶務の木村だけである。いわば，島小の教師たちの実践を担う主力部隊がすべて発表に当たっているといえるのである。

続いて，第３回学校公開研究会（1957年）[*27]では以下の通りである[*28]。

1　島小教育の説明　斉（ママ）藤

2　島小の基礎学力についての調査報告　県教育研究所[*29]

3　島小教育の分析　群馬大学，群馬教育文化研究所

（二）研究報告

1，教育技術の研究　船戸，杉本，滝沢

2，学習指導の型の研究　金子，金井

3，芸術教育の研究　武田，大沢，井上

4，子ども会とクラブ活動の研究　青山，海東

5，保育園と小学校とのつながり　赤坂，児島

ここで見られるように，同年度に取り組まれた県の教育研究所による学力調査の結果を受け校長の斎藤が説明に立っている。さらに，そのことに関する報告や分析が外部者により取り組まれている。それに続いて，教師たちの研究報告が行われる。第２回学校公開研究会（1956年）と同じく，学級担任をしている教師がすべてここに携わっている。

第１回学校公開研究会（1955年）では単独で取り組まれた研究発表が，第２回（1956年）ではペアとなり，第３回目（1957年）では，２名から３名のチームになっている点も特徴である。

次は，第４回学校公開研究会（1958年）である[*30]。

（二）職員の発表

1，教育における技術と演出と創造　斎藤

2，職員の合唱

3，研究発表

（1）科学的認識への指導　児島

（2）芸術的感動による意識の変革　武田，井上

（3）集団の質　滝沢，海東

（4）低学年での実践　赤坂

（5）教科指導の中での教師の仕ごと　船戸，岡芹

校長の斎藤を始め，７名の学級担任が発表（全教職員の46％，学級担任の58％）している。そのうち，単独で行っているのが本校２年担任の児島環，分校２年担任の赤坂里子である。武田（分校４年）と井上（本校５年），滝沢（本校３年）と海東（本校１年），船戸（分校６年）と岡芹（分

校５年）がペアになっている。

続いて第５回学校公開研究会（1959年）である[*31]。

（二）職員の発表

（１）芸術教育……武田常夫

（２）科学教育……児島環

（３）知識の定着……金子緯一郎

（４）個性について……滝沢友次

（５）よい授業するために……斎藤喜博

学級担任は，４名（全教職員の内の28％，学級担任の内の33％）である。その上，すべて単独で発表しているという特徴がある。島小教員による研究発表の機会が減少し，それにつれて，児童による表現活動的な発表が増加する。

ちなみに、島小においては、子どもの合唱や歌唱、朗読、行進、リズム運動、マット運動、跳び箱、野外劇など、表現的な活動を重視する教育実践を展開している。その学校づくりの内実が学校公開研究会の場で表された。斎藤喜博が学校づくりの中で子どもの姿の上に学力を発見する。そのための試みとして、子どもの合唱や行進、舞踊的な表現活動などを試行的に開始する。その日々の取り組みが学校公開研究会の場で発表されるわけである[*32]。

続いて第６回学校公開研究会（1960年）である[*33]。

３，島小教育の分析

（１）荒瀬豊[*34]（30分）……現代哲学としての島小教育

（２）木村次郎（15分）……芸術の中からの教育の発見―斎藤喜博とスタニスラフスキー―

（３）篠崎五六（15分）……指導の変革

（中略―引用者）

１，分科会

（１）教材の解釈

（２）芸術と教育

（３）授業による振幅と変革

ここには，島小教職員の名前は省かれており，荒瀬豊，木村次郎，篠崎五六と外部からの参加者が発表者となっている。分科会について，斎藤は1964年に刊行した自著『島小物語』（麥書房）の中で次のようにいう。「午後は，「教材の解釈」「芸術と教育」「授業による振幅と変革」の三つの分科会に分かれて話し合ったあと，校庭で全員集会をひらいた。全員集会は，職員合唱のあと，参加者の感想発表がつぎつぎと行なわれ，全員合唱をして散会になった[*35]」。従って職員による研究発表というよりは，テーマにしたがった参観者と島小教職員との討論の場であったとみることができる。

続いて第７回学校公開研究会（1961年）である[*36]。プログラムに氏名の記載はない。

８，職員の研究発表[*37]

金子緯一郎編『島小十一年史』によれば，金子緯一郎（本校３年），船戸咲子（分校４年）と金井栄子（本校５年），武田常夫（分校６年）の４名が発表に当たっている[*38]。

続いて最後の公開となる第８回学校公開研究会（1962年）[*39]には，該当するプログラムが存在しない。ほぼすべてが児童や教職員による表現活動的な発表である。

こうした展開の過程を見ると，学校公開研究会が初めて行われた時期（1955年～）においては，島小の教師たちが自らの実践を深めて，教育研究としてその内実を結晶化させていくプロセスを斎藤が重視したように見えるのである。今日的にいえば，省察的な実践者としての島小教師像を創り上げていったというようにみてよいかもしれない[*40]。教師たちが自立し，教師としての自己を確立していくように斎藤が促していたのではないかと考えられるのである。

そのことを裏付けるようにして，斎藤は，赴任当初から島小の教師たちの自信や誇りを取り戻そうとしている。例えば，『島小研究報告』という謄写版刷りの研究冊子の刊行である[*41]。これらを見ると，夏の合宿研究会と学校公開研究会が開始される以前（1952～1954年）において特に，斎

藤が教師たちに“書くこと”による自己解放を企図したと考えられる。斎藤は島小の教師たちに対して，次のようにいう。“教師にとって，書くこと，授業をすることが闘いである”。同時代に島小に勤務した教員がこのことを証言している*42。これらは，組合活動が盛んであった時代において，組合員校長としての斎藤が同校の教師たちに発言したことである。斎藤が政治や経済など，社会的な事象に対して無関心であったということはいえないが，そこからは一定の距離をとりつつ教育の仕事に専心する。そのことによって，社会変革を為し遂げるという意識をもっていた。このことは，強調してよい事実である。そうした中で，斎藤は，島小の教師たちに対して，“書くこと”を求めている。同時に，学校公開研究会（1955～1962年）により，学校教育活動を公開する。夏の合宿研究会（1955～1962年）を通じて，教師たちの教育実践研究を磨き上げる。それを学校公開研究会の中で発表させる。学校公開研究会のプログラムの変容には，そうした斎藤の意図が読み取れると思うのである。

その一方で，学校公開研究会では，児童による種目，演目が徐々に取り入れられる。そのプログラムが，年ごとに目立つようになる。児童による表現的な活動が実質的な意味をもつようになり，それを公開するわけである。

最後の学校公開研究会となった第８回学校公開研究会である1962（昭和37）年度においては，プログラムの大部分を児童による演目や種目が占めるようになる。学校公開研究会の初期段階（1955年）から，児童による取り組みが存在するわけであるが，それが年を追う毎に増えていくのである。

例えば，同校の教師であった船戸咲子が考案したとされるフォークダンスが毎年の学校公開研究会で取り組まれる。ただ単に取り組まれるだけではない。その後には，第２，第３フォークダンスと呼ばれる種目がつくられ，取り組まれる。

島小では，斎藤喜博の反対により正式には公開されなかったと思われる映画がある*43。その映画には，最終年度である1962年度の島小の教育活動が活写される。入学式のシーンでは，入学した児童を島小の６年生の児童や島小教職員が歓迎し，フォークダンスが行われている。そこには，ダンスに興じる保護者などの姿も見える。６年生の児童が新入生をエスコートし，校庭で行われた入学式は，実質主義を徹底した島小の真骨頂といってよいものである。

斎藤喜博が撮影した８ミリ映像が残されている。そこには，夏の合宿研究会の様子が記録されている。映像の中で島小の教師たちが実に楽しそうにフォークダンスに取り組む様子が残されている。こうした事実と重ね合わせると，学校公開研究会において常に取り組まれたフォークダンスの意図や目的が類推できる。おそらく学校を参観しに来た参加者や島小児童，島小教師，保護者，地域の住民などがお互いに心をひらいてフォークダンスに参加した。これ以外にも，合唱や舞踊，行進など，島小児童による種目や演目が次第に目立つようになっていく。

島小の学校づくりにおいては，表現活動を重視した*44。島小以降の学校づくり運動においては，むしろ，表現活動に取り組むことが中心であると思われる事例が出てくる*45。授業づくりは当然のことであるが，その授業づくりを支え，児童の自立を促し，児童の主体性を育む活動として“表現活動”が重視される。

しかしながら，島小の学校公開研究会においては，それが徐々に試行錯誤の末に花ひらいていったという事実が見られる。最初から表現活動の意義や効果を実感していたというよりは，学校づくりの過程において，表現活動の意義や価値，効果を実感していったとみるのが正しいと思われる。

学校公開研究会の第１回（1955年）では，児童の表現活動的な取り組みとしてみてよいプログラムは，２日目に取り組まれた“野外劇”，“児童合唱”，“寸劇等の発表”である。これ以外は，島小の教職員が主体となった演目，種目である。

ちなみに，島小において取り組まれた“野外劇”は，島小の職員であった金子緯一郎が編集し，麥書房から刊行された『島小十一年史』によると1955（昭和30）年10月１日と５日に行われた島小の“運動会”で取り組まれる。教材は，同じく金子緯一郎による“柿の木はだれのもの”という創作作品を島小児童の本校５年生，６年生が発表する。作品には曲が付けられており，その作曲を同じく同校の教師であった武田常夫が担当している*46。

この背景には，斎藤校長が島小教職員に対して，創作活動に携わることを推奨したことがある。斎藤は，自身も歌人であったことと重ね合わせたと考えられるが，島小の教職員に対して，さまざまな創作活動をすすめたのである。創作活動により，自己をひらき，自己を見つめる体験を重視したわけである*47。

このことは，島小教職員による演劇や合唱，創作，実践記録の執筆と発表，教育研究活動とその発表などが学校公開研究会の演目，種目になることとも深く繋がることと思われる*48。

4.　学校公開研究会による学校づくり

斎藤喜博は，島小以降において自身による学校づくりの成果をハレの舞台において公開するようになっていく。例えば，境小学校では，音楽会である。また，斎藤喜博が教育研究者として関わるその後の学校づくり運動において，学校公開研究会が開催され，そのことがその学校の成果を発揮する場としてとらえられている。その際，学校を公開するだけの実質が学校の教育実践として実現し得ているかが問題とされる。児童の姿の上に，美を創造するということを斎藤は目指していたと考えられるが，その美の実質が，本質的に児童の学力に根ざしているのかということが課題になったと考えられる。

島小においては，斎藤が校長として在職した11年間において，全８回の学校公開研究会が開催された。その中でいかなる児童の美が花ひらいたかということの検討が今後必要となる。稿を改め，追究する予定である。

＊１　神戸の御影小学校が1967年から８回にわたり学校公開研究会を開催したのに続き，広島の大田小学校が1971年から６回，東京の瑞穂第三小学校が1980年から６回と続いている。斎藤喜博の没後は，これより少ない回数の学校づくりが続いている。

＊２　15名の島小教職員が1952年に在籍しており，この年に斎藤喜博だけが新たに島小に赴任してきた教師である。

＊３　栗田（旧姓柴田）梅乃は，おそらく斎藤より年が若かったが，資料からはその年齢を明らかに出来ていない。

＊４　狩野，島小における教職員の力量形成，鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，第10巻，47～62頁，2000年。

＊５　狩野，島小における「解放」と教育，鹿児島大学教育学部研究紀要．教育科学編，第51巻，217～236頁，1999年。

＊６　狩野，島小における「解放」と教育，前出。

＊７　例えば，公開研究会の場で，船戸咲子と参観者との間で，遅刻を巡って討論となったことなどのエピソードがある。

＊８　狩野，島小における学校行事の展開，鹿児島大学教育学部研究紀要．教育科学編，第56巻，137～163頁，2004年。

＊９　狩野，島小における学校行事の展開〈前出〉。

＊10　狩野，島小における解放と教育〈前出〉。

＊11　なぜ，学校公開研究会を開催したのか。それは，日常的な学校参観者が増え続ける中で，集中的に学校を公開し，学校教育の成果を見てもらおうと斎藤が考えたからだと考えられる。斎藤が島小校長となった以降，しばしば学校参観者が島小を訪ね，そ

れへの対応に苦慮した記録が残っている。

＊12　授業研究を核とする学校づくり運動の中でも，今日では，１日で行う学校公開研究会が多くなってきている。

＊13　狩野，島小の教育実践―学校づくりにおける公開研究会を中心に―，十文字学園女子大学紀要，第49巻，123～135頁，2019年。

＊14　狩野，授業研究を核とする学校づくりに関する研究―島小における学校公開研究会を中心に―〈前出〉

＊15　第１回の学校公開研究会（1955年）については，学校公開研究会当日に使用されたと思われる要綱（プログラム）などが未発見である。大空社から刊行された『島小研究報告第７巻』は，学校公開研究会の資料をオフセット印刷で公刊したものであるが，そこにおいても，第１回学校公開研究会の資料だけが掲載されず，かわりに群馬県県教組発行の『文化労働』２月号（昭和31年）がそのまま転載されている。以下，その他の資料を用いて，第１回目の公開研におけるプログラムを再構成する。（『斎藤喜博全集』第11巻〈前出〉，418頁）

＊16　『斎藤喜博全集』第11巻〈前出〉568頁によれば，「川尻（仮名）」は，井上光正のことであると推定される。

＊17　第１回学校公開研究会（1955年）。上記の１～５にある“発表題目”の後の担当者名は，刊行された文献上では仮名であるので，他の資料から類推し，本名を括弧内に入れた。このように，島小学校公開研究会当初のプログラムにおいては，島小教職員による研究発表が目につく。そして，この研究発表が島小において毎年取り組まれた夏の合宿研究会と共に，文書としての研究発表の機会であった『島小研究報告』の内容に反映している。島小の教職員に対して，斎藤は，実践記録を書くことが“教師としての闘いである”と発言したことが記録されている。そうした斎藤校長の思いに島小教職員が応えていたことが公開研のプログラムにも如実に表れている。

＊18　金子緯一郎編『島小十一年史』34頁，麥書房，1966年（引用は，オフセット印刷による復刻版『島小研究報告』1995年，大空社による）によると，昭和30年11月の欄に大沢清剛が県教研集会において「私の図画指導」と題して発表したと記録されている。島小研究集録第９集では，大沢清剛と金井栄子が共著で「私たちの図画指導」という文章を書いている。

＊19　第１回学校公開研究会。夏休みにこの年（1955年）から毎年合宿が行われ，その際，職員の研究発表が行われている。それと対応して，学校公開研究会においても教職員の報告が行われている。成果は，『島小研究報告』として謄写版刷りで公表されている。

＊20　島小研究集会　教育技術の研究　昭和31年11月21日群馬県島小学校本校（『島小研究報告』第７巻，1996年，大空社（復刻版）所収）

＊21　テーマは，「教室づくり」（金子編『島小十一年史』〈前出〉44頁）

＊22　テーマは「学級づくり」（同前）

＊23　テーマは，「教材の教え方」（同前）

＊24　テーマは，「教育技術としての教師の演技と演出」（同前）

＊25　テーマは，「教師の知識と知識欲がどう子どもに影響するか」（同前）

＊26　テーマは，「教師の現実のものの見方つかまえ方（やさしさとかきびしさとかを含む）がどう子どもに影響するか」（同前）

＊27　（『島小研究報告』第７巻，〈前出〉）第三回島小公開研究会　綜合検討（金子編『島小十一年史』〈前出〉56頁では，「島小教育の総合的研究」昭和32年12月６，７日　群馬県島小学校。

＊28　金子編『島小十一年史』〈前出〉57頁によると，昭和32年11月27日（本校），28日（分校）において，「公開村内発表会」を行ったとある。内容は未詳である（斎藤喜博年譜には，昭和32年11月27日，28日島小公開研究会村内発表会とある（『斎藤喜博全集第15巻-２』376頁，国土社，1971年）。

＊29　第３回学校公開研究会。金子編『島小十一年史』〈前出〉56頁によると，昭和32年11月25，26日，県の教育研究所に依頼し，算数，国語の標準学力テスト（田（ママ）研式）を受けたとある。斎藤喜博『授業入門』，『島小物語』に言及がある。

＊30　（『島小研究報告』第７巻，〈前出〉）第四回島小公開研究会　教育における技術と演出と創造　群馬縣・島小学校1958.12.5～６.。

＊31　（『島小研究報告』第７巻，〈前出〉）第五回島小公開研究会　授業の原則　群馬縣・島小学校1959.12.4。

＊32　狩野，島小における学校行事の展開，鹿児島大学教育学部研究紀要．教育科学編，第56巻，137-163頁，2004。

＊33　（『島小研究報告』第７巻，〈前出〉）第六回島小公開研究会　授業による教師と子どもの変革　群馬県・島小学校1960年12月２日３日。

＊34　このほかにこの人物が島小に入った記録が，管見の限り見つかっていない。

＊35　230頁。後に『斎藤喜博全集』11，555～556頁，1970年に所収。

＊36　（『島小研究報告』第７巻，〈前出〉）第七回島小公開研究会〈教育の可能性と限界性〉昭和36年12月８日（金）９日（土）群馬県・島小学校

＊37　学校教育の可能性と限界性（金子緯一郎），教材の解釈と展開（船戸咲子，金井栄子），芸術教育での教材の解釈と展開（武田常夫）。金子編『島小十一年史』〈前出〉106頁。

＊38　斎藤『島小物語』〈前出〉283頁には，「午後は薮塚町の公民館へ，参加者も子どもも貸切りバスで移動し，そこで職員パレード，職員舞踊，子どもの合唱，職員の合唱，職員劇「さとる」（木村次郎作），職員の研究報告などをした。私も「授業の質」という題で少し話をした」と記録されている。

＊39　（『島小研究報告』第７巻，〈前出〉）第八回島小公開研究会〈教材の解釈と展開〉昭和37年12月15日（土）群馬県・島小学校（「この公開研究会のようすは『教育の演出』“公開研究会での演出”として書かかれている（95頁～）（『島小十一年史』123頁）。

＊40　狩野，島小における教職員の力量形成，〈前出〉。

＊41　大空社からオフセット印刷による復刻版が出ている。

＊42　狩野，島小における教職員の力量形成，〈前出〉。

＊43　映画「芽を吹く子ども」は，近代映画社により斎藤喜博校長島小11年目の年度に撮影された。斎藤の強い反対により，その後公式に公開されたかどうか未詳である（『斎藤喜博全集』第７巻，400～410頁，国土社，1970年，初出は，斎藤喜博『教育現場ノート』明治図書出版，1963年）。

＊44　狩野，授業研究を核とする学校づくり運動に関する総合的研究―島小における表現活動の発生と展開―，十文字学園女子大学人間生活学部研究紀要，第７巻，33～46頁，2009年。

＊45　狩野，沖縄の教育実践から見えてくるもの，鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要（特別号３号），117～128頁，2007年。

＊46　金子編『島小十一年史』〈前出〉34頁。

＊47　狩野，島小における解放と教育〈前出〉。

＊48　狩野，島小の教育実践―教師教育，十文字学園女子大学人間生活学部研究紀要，第５

巻，73～86頁，2007年。

【附記】

本稿の執筆にあたり，科学研究費JSPS科研費JP21K02246の助成を受けた。